

そうまぎよふう
相馬御風



明治 16 年(1883)～昭和 25 年 (1950)

明治・大正・昭和の三代にわたり叙情歌人、または自然主義評論家として活躍した相馬御風・本名昌治（まさはる・通称名しょうじ）は、明治 16 年 7 月 10 日、糸魚川町大字大町（現糸魚川市大町 2 丁目）に、糸魚川町長を務めた父徳治郎の一人息子として生まれました。相馬家は代々社寺建築を生業とした旧家で、相馬家一族による建築物は糸魚川市内に数多く見られます。

御風の文才は幼時より秀で、組合立糸魚川高等小学校時代には既に和歌を詠み窓竹（そうちく）と号し、また高田中学時代には御風と号しています。

中学卒業後、与謝野鉄幹の新詩社に入会し、「明星」の同人にまでなりますが、早稲田大学入学後、岩野泡鳴等と東京純文社を結成、雑誌「白百合」を発刊し、浪漫主義文芸の進展と詩歌の革新を呼びかけ、同 38 年には東京純文社から処女歌集『睡蓮』を出版しています。同 39 年、早稲田大学文学部文学科を卒業し、早稲田文学社に入り「早稲田文学」の編集を担当し、当時全盛をきわめた自然主義文学運動の先鋒として、文芸評論で活躍しています。

一方早稲田詩社を結成し、自由な言葉とリズムによる新しい詩のメロディの「口語自由詩」を提唱しました。

同 40 年には早稲田大学創立 25 周年に際し、大学や恩師に委嘱されて作詞した校歌「都の西北」は不朽の名作として今も歌い継がれています。

大正初年には、トルストイの人道主義に傾倒し、『戦争と平和』など多数のロシア文学の翻訳本を出版しています。また同 5 年 2 月、自己懺悔の書といわれる『還元録』を出版し、突然故郷糸魚川に退住しました。

退住後は、良寛研究書を多数出版し、良寛の名を世に広めました。また一人雑誌「野を歩む者」を刊行し、郷土に住む人々の良さを称えています。

昭和 25 年 5 月 8 日午前 10 時 40 分、脳溢血のため亡くなりました。享年 66 歳でした。法名「大空院文誉白雲御風居士」と言い、同 27 年、遺稿随筆『静かなる恍惚』が出版されています。

きむらしゅう
木村秋雨

明治 39 年 (1906) ~ 昭和 63 年 (1988)

俳諧研究者として知られ、名は淑澄といい、僧名は孝禪、秋雨は号です。明治 39 年 11 月 3 日、新潟県中頸城郡三郷村下四ツ屋 (現上越市) に 7 人兄弟の長男として生まれました。板倉町有恒学舎 (現・県立有恒高校) を中途退学しました。

昭和初年の不況時に長岡警察署巡查を 5 年間勤務しましたが、後放浪生活に入りました。早くから俳諧・和歌・書道などの芸道に強くひかれ、良寛にあこがれました。

また歌人会津八一の早稲田大学付属中学校教頭時代の歌集「南京新唱」に感激した秋雨翁は、八一に乞うて独身暮らしの東京落合のその居に住み込み、犬馬の労を尽くしました。その後、また放浪し京都に遊んで文人を歴訪しましたが、昭和 7 年、南魚沼郡の雲洞庵に入り得度して禅僧「孝禪」となりました。

この頃から相馬御風の盟友となり、御風の良寛研究を助け資料の収集に奔走しました。

戦時中は京都で代用教員を務め、戦後帰郷し、高田市文化財保護委員として活躍しました。特に古文書の読解は天才的でした。

また、茶人であり料理に巧者、何事にも筋目を尊び、風流韻事に関しては博覧強記、孜孜として研究生活を続けていましたが、10 年余りの入院生活のすえ昭和 63 年 10 月 24 日に他界しました。享年 81 歳でした。

秋雨が集めた貴重な資料は 9,000 点以上にのぼりますが、昭和 57 年に糸魚川市に寄贈され、当館で大切に保管されています。